



男墮とし

ギャルのの

プロローグ 背徳 1

～教師編～

※ここからが製品版になります。

忠告 31

捕食 72

エピローグ 沈殿 115



志方マヤ

ドSギャル少女

圧倒的な性テクニック

で男をおもちゃにする

ことにハマっている

中年男 …… 最近のマヤのお気に入り、妻子持ちほぼ調教済み

教師 …… マヤのクラス担任、三十代独身

井澤美穂(ミホ) …… マヤの友人、黒髪ロングのクール系美女

北川亜子(アコ) …… マヤの友人、コムギ焼けの茶髪ギャル

中島舞美(マイ) …… マヤの友人、童顔巨乳の天然少女

ギャルの男堕とし

プロローグ 背徳

式 フロン

くちゆくちゆと淫猥な水音が鳴り響く室内に、ハアハアと男の低いあえぎ
声が交じり合う。

部屋の端に置かれているベッドの上で、だらしない肉体の男が四つん這
いの姿で息をあげている。



その後ろから、学制服を着た少女が男の股間へ白い手を差し込んでいた。

少女が差し入れた手を細かく振動させるたびに、男の下半身はブルブルとふるえて断続的なあえぎがもれだす。

まるでお気に入りの楽器で演奏を楽しんでいるかのように、少女は口元に笑みをたたえたまま細い腕を器用に動かしては男を操っていた。

「やらしい……、だんだんおマタが開いてきてるけど？」

低いささやくようなつぶやきだが、その声は部屋全体へと響くような音質をもっていた。

少女の言葉通り、たるんだ贅肉のついている男の下半身は今にも崩れそうなほど足をふるわせて股をひろげていく。

「あっ、ああっ……っ」

だらしなくもれた声と共に、男の両股がシートへと落ちそうになると――

「あひっっ」

バシンっとかわいた音が鳴り、男が声をあげて腰を跳ね上げた。

「ダメじゃん、勝手にお尻をおとしちゃ？」

男の粗相をとがめるように白い手が尻の谷間を軽くはたく。

スナップをきかせるような手打ちだったが男の尻は弱点をつかれたように大きくふるえていた。

「ガマン覚えなおじさん、てゅーかだんだんヒドくなってるし」

「あううっ、でもそんな、マヤちゃっ――、ひっっ」

少女の言葉に言い訳をしようとした男の声が、悲鳴でさえぎられる。

股間に少女の腕が再び差し込まれたからだ。

「調教がたりないないかあ？ 誰がイイワケしてもいいっていったし」

言葉と共に少女のしなやかな指がかぎ爪をつくると、男のあまった臀部の肉へと沈み込んだ。

「ひっ、ひいいいっ」

ギリギリと尻肉を引っ張るように少女が右手でお尻をつねりあげる。その責めに耐えきれず大の男が頭を枕へとうずめながら腰を持ち上げて、痴態をさらしていく。

細い腕一本で中年男性を弄ぶ、この少女の名前は志方マヤといった。切れ長の両目に筋の通った鼻だち、卵型のおでこに両側から流れるように流麗な金髪がおりている。

制服に身を包んではいるが、大人びた顔つきはとても学生とは思えない程、妖艶な雰囲気をもしだしていた。

ふるえながら腰を持ちあげる男の尻間に手を入れて軽く揺らすと太いあえぎ声が漏れ出す。

その様子を鋭い眼光で見つめる少女には貫禄すらただよっていた。

男を転がすことが、当たり前とでもいうかのごとく少女の表情は冷めきっている。

すでに少女はこの中年の男を完全に支配下においている。

度重なる性^{テクニク}技での翻弄、調教の結果だった。

今日もまたお馴染みとなったラブホテルの一室で、志方マヤは男の弱点をさらけさせていた。

「今ので、どんどん先っぽから真っ赤にナッテンだけど？ 恥かしい」

四つん這いで揺れる尻の真ん中からのびる一本の肉棒が、マヤの指摘を受けてビクンとふるえる。

高ぶりいきり立つオスの欲望をしりめに、少女の細腕は尻肉を解放して、太ももの根本をゆっくりと撫でまわしていった。

「発情ハンパないね」

太ももの根本、股の間で両手を手刀の形でそえて静止させる。

そのまま数秒間、動きを止めた後――

「ふうふううううっ」

口を尖らせて、マヤは男の大きなお尻の谷間にめがけて息を吹きかけた。

「ひ、ひいいいいいっ」

ぶるぶると面白いように跳ねる男の下半身。

「お尻よっわw」

嘲笑——

あきれるような声に、からかいの響きが交じる。

それは純粹な軽蔑だけでなく、気に入ったオモチャであそぶような微妙な愛着。

だが、男の方にそれを感じ取る余裕などまったくくない。

「ああっ、マヤちゃん今日は後ろはしないって、——ひゃああっ」

うつ伏せになりながら、振り返るように弱々しく抗議するその男の下半身がビクンツと浮き上がる。

「後ろって、肛門アナナルはおあずけって言ったけど、お尻で勝手に発情しちゃってんのはアンタじゃんか」

あきれた声で話すギャルの、股の付け根にある手刀が形を変える。

挟むように男の垂れた陰囊の根元に爪をたてて、くい込む。

「今日はタマタマで遊ぼうとしてたんだけど、想像以上にお尻が欲しがってきてヒくんだけど——、ふうふうううううっ」

持ち上がった臀部に再び、妖しく光るラメ入りのルーージュの唇から吐息がはなたれる。

下からなぞるように息吹がお尻の割れ目に流れ込み、釣られるように男の

下半身が反り返っていく。

「ああっ、ああああっ」

快楽に屈服するように中年の身体が猫のポーズを取る様はもはや、だらしないを通り越して惨めさすら感じさせた。

「うっわあ、おじさんヤバイよそのカッコ、男がさらしているタイセイじゃないんだケド？」

「そ、それはっ」

中年の自分が少女相手にみせるとんでもない痴態、それを指摘されて男は慌てて腰を下ろそうとする。

だが――

「ひっ」

「コラっ、見られたいんでしょ？　さらしてみ？」

マヤの手はそれを許さず、睾丸の根元を押さえたままグリグリと上へと持ち上げた。

丁度、少女の目の前にダラリと垂れた陰囊とその後ろからビクビクと張りつめた淫棒が晒される。

「あーらら、もう先っぽまでパンツパンじゃん、おしるもデてきてるし」

ぷっくりとふくれた真っ赤になった亀頭、先っぽからキラリと光る透明な汁が玉をつくっていく。

その様子をマヤはじっと見つめていたが――

「おじさん、これベッドまでイト垂らしたら、……泣かすから」

「愉しむような口調から、急に冷たい女王のような威厳のある言葉が紡がれる。

ペニスの先から流れ出るガマン汁をシートまで垂れ流す。
そんな男として恥ずかしい行為マヤは許さないと宣言した。

桃色の照明が部屋全体を照らしたそのベッドの上で、情けない中年が全身を硬直させた。

浅い息を吐きながら男の額からタラリと汗が流れおちる。

「ま、マヤちゃん……」

一瞬そんなこと無理だと、抗議しようとした男だがこれまでの体験から言葉をおさえる。

逆らっても無駄、というよりは逆らう事などできないと少女の性^{テクニク} 技によつてさんざんわからされている。

勃起している張りつめたペニス、その先から漏れ出ているガマン汁。それを止めるという不可能に近い行為。

少女の命令に抗議しても、更に厳しいお仕置きがまっているだろう。予想できるのはただ痛いだけの仕置き。

完全に手懐けられている男だが、肉体的痛みはキツイ。

軽いパンキングや甘噛み程度ならまだ耐えられるがその先は、

——未経験であり恐怖だった。

「安心してよこのまま手は動かさしないでアゲル、息も吹きかけない……少しガマン出来たら終わりにしてアゲるよ」

ほとんどあきらめに近い気持ちを感じている男に、マヤが助け船をだすようにそうつぶやいた。

その言葉に中年の男はかすかだが希望を感じた。

「ほ、本当？ マヤちゃ」

安堵するように少し明るくなった男の声。

「そうだから安心してえ」

だが被さった言葉と共に、少女の目がスッと細まった。

「ヘンタイチンポをふるわせろ……」

「——ッッッッ、ッッ」

脳髓を直撃するような冷たい罵倒。

それはすんなりと躓けられた男の脳へと流れ込む。

「先っぽをパクパクさせろ」

まるで耳元でささやくような低い声。

調教時に射精をうながすときに出す、刷り込みに近い低音。

「だらしな——くたまってるチンポのおしるを、ぷっくりとふくませてえ情けなくタレながせ」

「ああっ、それ、やめッダメ」

言葉に煽られて、ペニスがグンッとひとまわり太くなる。

その真っ赤にふくれた亀頭がプルプルとふるえだし先っぽの尿道口が開かれる。

粘度をもった透明な液体が吐き出され大きく玉をつくとツ——と垂れ下がった。

「ダメ？ はあ？ ダメなのはこの程度の言葉責めでおもらしする——」

「ああッ——」

「マ・ゾ・チ・ン・ポ・だろ？」

マヤの区切るように強調する低音の罵倒が室内に、響きわたる。

その一語、一語が興奮の段階を底上げするように淫棒を、ビクビクとそり上げさせると――、

「もつと垂らせ……」

ぼつりつつぶやいたマヤの言葉に合わせたかのように、ダラーと透明なガマン汁が先っぽからあふれ出す。

勢いよくベッドまで糸を引くとシーツに小さな染みをつくった。

「あつ、あつ、ああっ……」

「はい、泣かす」

冷たい表情で決定事項を告げる少女。

身体をうつ伏せにして突っ伏した中年男は、敗北の声をもらしたまま下半身をふるわせる。

その両股の間に流れ落ちる透明な汁の糸に、少女の白い右手が差し込まれた。

「いいオトナの男がこんなシル垂れ流して――」

すくうように手のひらに汁をためると、

「恥ずかしくないの？」

「ひゃっ、あああっひぎいい」

グチュリッと先っぽにからませるように手のひらで、亀頭を握りしめた。ふるえる臀部、股の間から突き出たペニスをギャルの細い手が捕食する。真っ赤にぷっくりとふくれた男の亀頭を、白く冷たい五本の蛇が絞め墮とすようからみつく。

ペニスの傘のくぼみ、カリ首に爪先がひっかかるとわしづかむように五本

の指が圧をかけた。

「ひ、ひゃあああっっ」

「熱くなってきた、まああだ先っぽから汁もれ続けてるし……」

冷静に冷徹に、右手で亀頭を握りながらマヤの視線は男の全身をじっくりと観察していた。

腰を持ち上げて、両脚をブルブルとふるわせるだらしない中年の身体。背後から右腕一本で、亀頭を握りしめられ男の全身は支配されていた。

その下半身、少女に捕らわれたペニスの先端からまるで快樂の波がひろがるように皮膚が微かに朱を帯びていくのをマヤは見逃さない。

少女の口元がニヤリとつり上がる。

「コーンしてきたな？」

嗜虐の感情を隠しきれない、愉しそうな声もれる。

その言葉に凶星をつかれたかのように一瞬、男のふるえがおさまった。硬直した下半身に、マヤのもう一本の左腕が伸びる。

三本の指先が、からかうように垂れた袋の皮をつまんだ。

右手はいまだに亀頭をギュッと握りしめながら、左手で陰囊を指先でブルブルとふるわせて遊ぶ。

その動きに、男の睾丸がキュッと収縮するように奥へとつり上がった。

同時に目に見えて尻の谷間を中心に、皮膚が赤く染まっていった

朱がお尻全体を染め上げた瞬間――

「されたいんだW? ……ヘンタイ」

「あっ、ち、ちがっ」

パツチョンツツと湿った音が部屋に響きわたり、中年の身体がベッドの上で跳ね上がった。

「ひゃああああああっつつつつあぁあ」

少女の右手は亀頭を握りしめたまま、左手が陰囊とお尻の間、蟻の門渡りを鋭くたたき上げていた。

下半身に刺激が走り、浮き上がるような衝撃に両手が丸くシーツをつかむ。耐えるように顔を枕にうずめた男の耳に

「泣けッ……まあぞオトコ」

少女のモノとは思えない程低い、妖艶な声が耳朶を犯した。その瞬間、やけるような熱い快楽が肉棒の先端を襲った。

「ひいぎゃあああああああああああああああああああああ」

男の敏感な亀頭の下、カリ首に添えられた指の腹がエラにひっかかると、ギョッギョッと圧迫しながらひねりをくわえられた。

目から火花が飛び散るような強烈な感覚。

その刺激に耐えられず――

“ぶしゅうううううつつつつつつつつ”

中年の淫棒から透明な潮が一気にふきあがった。

「ああああああああっ」

甘い放出の快楽をすっ飛ばして、強制的にもたらされた焼け付くようなおもらしの感覚。

その異常な感覚と羞恥に腰を落とそうとすると、

「隠そうとスナ、ヘンタイさらしてけよ？ マゾなんだから」

容赦のない冷たい言葉と同時に、尻タブの肉をつかむように握られて腰が浮かされる。

右手は蛇口をひねるようにギュッギュッと亀頭を回転させると、おもらしが再び勢いよく飛び散った。

「あーあ、びっしょびっしょ、こどもかよw」

「うううっっ」

一通り亀頭をいじり回して潮を噴き出させると、マヤは右手を離してあきれたようにつぶやいた。

右手から透明な液体がポタポタとしたりおちる。

ヒクヒクと動く淫棒からもれる小便のような無臭のおもらし。

それを眺めつつマヤはゆっくりと左手でつかんでいた尻タブの肉を解放した。

持ち上げられていた中年の腰が支えを失い急激に力がぬける。

ゆるやかに股を広げながら、潮とガマン汁でぬれたシャツの上に肉体が落ちていった。

ぺたんと脱力したカエルのように横たわった男の肉体に、乗り上げるようにマヤが腰を落とした。

「どうよおじさん、泣いた？」

背中上添うようにぴったりとくっついた少女が突っ伏した男の頭に顔を近づける。

髪の毛を無造作に、つかむとに枕にうずめた中年の頭をグイッと起こして、表情をじいじいと観察した。

絹のようなサラサラとした金色の髪が中年の頬をなでさする。

その合間からのぞく鋭い眼光は獲物を捕食する蛇のように冷たかった。

「……んー、さすがに涙はでてないかぁ」

顔を真っ赤にさせて目をつぶる男に対して、マヤはつまらなそうにつぶやくと手をはなした。

そのまま倒れ込むように中年の顔が突っ伏しる。

それだけですんだ事に、男は心の中でひそかに安堵した。

正直、いいようなない恥ずかしさに惨めな気持ちでいっぱいだった。

射精をさせてもらえず、男として尊厳を奪われるような潮ふき。

だが、さすがに半世紀以上生きてきたオトナとして涙を流すほどまでにはいたらなかった。

手玉に取られる羞恥や痛覚に似た肉体の感覚だけでは、涙をだして泣くほどの感情の揺れは起きなかった。

それは少女によって遊ばれることが辛さより喜びが勝っている証拠でもあり、マゾとして調教された結果だが、男にはその自覚はなかった。

命拾いしたと思っていた男の背中からマヤがお尻を浮かせる。

「……………」

男がこれ以上責められずにすむという安堵と、これで終わってしまうのかという名残おしさに複雑な気持ちになっていると、

「もっかい四つん這いね」

マヤから再び恥ずかしい恰好の命令がなされた。

突っ伏した中年の肉体、その心臓がドクンと跳ね上がる。

「尻あげな？ ホラ早く」

「ひ、は、はいっ」

催促するようにお尻をつねった白い指にうながされて、モソモソと身体を起こして四つん這いになる。

体力を奪われて、羞恥から疲労もあるがそれ以上に男の心は新たな期待で高鳴っていた。

「マゾこじらせ過ぎて泣けなくなったおじさんには、責め方を変えてアゲル」

四つん這いでびっしょりと体液でぬれた身体に、マヤは事前に用意していたであろうタオルをあてると丁寧にも男の下半身を拭いていった。

お腹から股全体、そして尻にいたるまでキレイに潮と先汁をぬぐう。それだけで、男の身体は期待するように高まっていった。

そのまま濡れたシーツを取り替えると新しくバスタオルを四つん這いの男の下へとひく。

「やさしく、甘々に責めてあげようかな」

股の間をタオルで拭いながらそうつぶやいたマヤに、男はうっとりとしながらも疑問を覚えた。

快楽で甘くイジメられて泣かされることも、今までにあったかもしれない。だがそれは結局、お尻、すなわちアナル責めが主体となっていた。さんざんマヤに開発された弱点である前立腺を中心とした焦らし責めならありえるかもしれない。

しかし、今日は――

「おじさんの想像どおり、アナル責めはしないから」

マヤはそう不敵に言い放つと、両手を陰囊へとはわせていった。ふたつのタマを包み込むようにすくうと、たぶたぶと波立たせる。甘くリラックスした心地よさが陰囊を中心に下半身にひろがっていく。

「ココからゆっくり、とかしてイってあげる」

つぶやきとともに、くすぐるように両手の指が今度は器用に二つのタマを可愛がっていく。

それはすでに手慣れた愛撫で、幾度となく男がされてきた弱い刺激。ジンジンと精巣を直撃する積み重なる性感に、腰が落ちそうになる。

先ほどまで、潮を吹き散らしていたペニスも本流である射精までいたらなかったこともあって、早くもギンギンに張りつめだしていた。

両手を使って細かく転がされる二つのタマ。

うっとりする刺激だが、マヤがその気になれば、いつでも地獄のような悶絶が味合わされる危険な急所でもある。

“泣かす”と宣言されているため、男はマヤの甘い愛撫を受けながらも、どこか油断の出来ない緊張感をいだいていた。

根元からほぐすように指先が陰囊の奥を刺激する。

「あううっ、い、イイ気持ちいい……」

「うん？　そうは言ってるけど、お尻の筋はツツパてる、ケイカイしてんねえ」

張りつめた鼠径部に通っている二本の筋。

そこが睾丸への刺激に警戒するように、硬くなっているのをマヤは見逃していなかった。

「まっ、関係ないけどね」

小さくつぶやいたマヤは一度、陰囊から手をはなすと根元から太股に向かってくすぐるようになでさすった。

「あぐっ」

毛穴がひろがるような心地よさに思わず筋がゆるむ。

その軽く開いた股に再び両手が陰囊の根元を挟むと、今度は親指でアナル

の真下、会陰部をグリグリとマッサージした。

「あっ、いいっ」

陰囊のシワが伸びると、目に見えて根元から力が抜け落ちたのがわかった。

「はふうう」

中年の口からだらしない声もれでる。

「ちよっろw」

小馬鹿にするようにマヤの口から嘲笑がもれた。

そんな屈辱の言葉にも、ゆるやかな快楽にあらがえず、

下半身全体がお湯につかったようにダラリと弛緩すると、マヤの指は更に快楽に浸らせるように袋全体を揉み込んでいった。

グチュグチュとした音が響く。

いつの間にか、マヤの両手にはローションが浸されており人肌の温度で暖かな心地よい刺激を与えていた。

睾丸を中心に下半身を甘い刺激で掌握されていた中年男は、今や完全に急所への警戒を解いていた。

「はっw、だらしなくタレてえチンポまたおもらししてきてるw」

実際マヤの言葉通り、中年男の下半身は陰囊を何度も執拗に揉み込まれてユルユルに弛緩しきっており、その先にあるペニスはビクビクとはりつめて先からは透明な液体がしたたり落ちている。

お尻を持ち上げながら、恥ずかしい恰好で再び尻を少女に向かってさらしている中年は、タマだけの緩い愛撫に抗うこともできずになすがままになっていた。

「いい感じでチンポも仕上がってきてるし、可愛がってくかなあ」

男のだらけきった姿勢を眺めながら、マヤがチロリと唇をなめると、タマを揉んでいた右手が離れていく。

左手一本で陰囊を持ち変えると、股の間からグイッと手前に引き寄せると股間を目の前につきださせた。

引っ張りだされた陰囊と一緒に、ヒクヒクと張りつめた陰茎が少女の目の前にくる。

「裏側のこのあたりは、あんまり責めたことないから……、どうかな？」

ギャル少女の目が、細まり真剣な表情へ変化する。

さらけだされたふるえるペニスの裏側、そこにしなやかな右手の指が伸びる。

細長い二本の中指と人差し指が、赤黒いペニスの裏筋にピトリとはりついた。

「ほらココどう？ 気持ちいい？」

尿道を刺激するように、二本の指がスーッと竿をすべりおろす。

「ああっ」

「おっ、デてきた、デてきた、タイリョウじゃん♪」

左手で睾丸を揉みながら右手が真っ赤な陰茎の裏側の筋を何度も何度も二本指でツー、ツーツと上下になで下ろす。

その刺激に快楽の素が尿道を通りぬけ、透明なガマン汁として鈴口から勢いよくダラダラと流れおちる。

先ほどと同じような光景。

だが刺激となっている質は、まったく違う。

先ほどまでは調教の成果における羞恥の快楽。

今、中年の身体に流れているのは純粋な性刺激による甘い快楽。

少女マヤとの性行為では珍しくシンプルな手淫の気持ちよさだった。

“この状態のまま睾丸とペニスへの快楽で、果てさせてもらえるのか？”と男がだらしなく先汁を垂らしながらそんなことをぼんやりと考えていると、

「おじさん、キモチよく♡白いのいっちゃおっか？」

「ああっ」

妙にやさしい響きのこもった声が後ろから聞こえてきた。

珍しいマヤの言動にどこか不自然なものを覚えながらも、股の間でグチュグチュと洗われる心地よさにながされて、男の射精欲はふくらんでいく。

「マヤちゃん、い、いいの？ デ、デそうだよもう、イキたい！」

裏筋を撫でさすっていつていた、二本の指は尿道を揉みほぐすように甘く愛撫を繰り返す。

もはや溜まりに溜まった白い欲望が、ジワジワと解放へと向けて陰囊全体を熱くさせていた。

「んふっ別にイイよ、イイけど、……ホントにいいのパ・パ？」

“パパ？”

男は一瞬なにを言われたのか理解できずに、いぶかしげに股の間をのぞくように後ろを見た。

「パパあ？ ここにぶっかけていいのかなあ？」

からかうように底意地の悪い笑みを浮かべながらマヤがスマホを持って中年男の下半身の下へと差し出す。

ダラダラと垂れ流す透明な汁のわずかに上、ヒクつくペニスの下に敷くように男のスマートフォンが置かれた。

「カワイイタイセツな奥さんと娘ちゃんにしろーい、だらしないうるぶち

まけちゃうよ？」

「あ、ああっ、そ……」

それはまぎれもなく、男がいつも使っているスマートフォン。

部屋の薄暗い桃色の照明の中でもはっきりとわかる。

のぞき込んだ男の股間の下にはいつも見慣れている、妻のそして娘の待ち受け画像がうつっていた。

パパとは娘が自分を呼ぶときの言葉。

「そ、それ、マヤちゃんっ」

状況を理解して、パニックになった男は反射的に四つん這いの身体を起こそうとしたが――

「逃げんなっ」

一瞬、揉まれている陰囊がグチュリとつよく握りしめられた。

「あがっ」

「腰を浮かしたら、このまま思いつきお尻噛んで、ケツ穴を指でゴリゴリにほじって強制射精させっからな？」

ジワッ

その冷たい罵声に、尿道口から汁が勢いを増した。

「はぁ？ マジ、マジじゃん」

あきれるようなマヤの言葉。

牽制するために行った脅しが逆効果になり、真っ赤な淫棒は放出への準備を完全に整えていた。

筋金入りのDSギャルであるマヤにとって、このままでは全く面白くな

い結末になる。

あっけなく精液をぶちまけてすぐに終わってしまったのは、何の愉しみもない。

マヤが見たいのは、オトナの男が我慢と葛藤の末に、快楽に打ち勝てずに自分の性テクに屈服する姿なのだ。

一瞬で果てさせてやるつもりなどみじんも無かった。

「あっ、あああっ」

男が四つん這いでビクビクと全身をふるわせて、ペニスが上下にふるえる。先端から撒き散らすように先汁が飛び散り、すでにモニターをぬらしていた。

「ちょっとおじさん？　ほんつとにぶっかけんの？　最低なんだけどお」

軽い煽りを入れながら、マヤはスマホを右手で持つと四つん這いの男の顔へ画像を向ける。

「ちゃんと見ろ、コレは誰？　ねえガマンしないでいいの？」

妻と娘が抱き合っている写真。

幸せそうな笑顔をわざわざ拡大して見せつけてやる。

「はあはあ、イヤです、嫌だ、我慢する、絶対出しません！」

すると目にうつった愛すべき家族への積み重ねてきた想いが男を奮い立たせた。

「マヤちゃんそれはやっちゃダメだよ、……俺はマゾだけど、」

調教されて心身共に、躰けられてきた自分だが最後の線だけは守ってみせるという気概。

「……君は遊びのつもりかも知れないけど、絶対に耐えてみせるからっ！」

端から見れば四つん這いで幾度も醜態、痴態をさらして翻弄されてきた中年が今更、言える言葉ではない。

事実マヤも情けない体勢と、決意の言葉とのギャップに笑いを堪えるのに必死になる。

「つつぶぶ、はあそうだね、ならがんばろっか、おじさんw」

なんとか笑いをこらえようとマヤは口元をおさえる。

だがその言葉からは嘲笑は抑えきれずに完全に小馬鹿にした感情が滲んでいた。

マヤの機嫌は上向いていた、オモチャはこうやって抵抗してくれた方がいじめがいがあ。

最近お気に入りとなったこのオスは、尻穴のプレイで躰は完了していたが、まだ調教する余地を残していた。

そう、妻帯者という守るべき最後の砦。

それをマヤはあえてお尻アナルの躰では崩さないでいた。

“コレはまだまだ、時間をかけて遊ぶことができる玩具”

若い男での調教ではなかなか味わえない。

中年男性への調教は一つの重い人生を攻略するよう濃厚な“遊び”なのだ。

最後は背徳と快楽でグチャグチャにして、普通の人間では体験できない悦楽の沼に浸らせてやる。

自覚はないがマヤの強烈な嗜虐心は女子○校生の領域をはるかに超えていた。

「じゃあ、たえてみな？」

呪いにも似た濃すぎる感情をおくびにもださずに、あっさりつつぶやくと
マヤはゆっくりと唇を、臀部へと近づけていった。

男にとってこれは、何をされても絶対に耐えなければならない場面だっ
た。

四つん這いのまま尻を、まだ少女といえる年齢の女につきだすという、
羞恥極まりない恰好。

その体勢から、背後から白く細い少女の腕に男のプライドをユルユルにほ
ぐされていく。

グチュリグチュリと水音を立てて陰囊が弄ばれるたびに理性がとけるよう
な快樂が脳へとながれこむ。

蕩かすような手淫は、抵抗する男の意思を奪おうと容赦なく下半身をもて
あそぶ。

それを男はギリギリの理性で耐え忍んでいた。

放出への甘い欲望は常に脳へと断続的に命令を下す。

射精してしまえ、出してしまえと抗いがたいリビドーを刻んでくる。

それでも、それを強烈な意思で男は押さえ込んでいた。

根底にあるのは、今までに築きあげてきた自分の半生ともいうべき家族へ
の愛情と絆。

日常の大半を共にすごしてきた最愛の妻、そして何よりも大切でいとおし
い娘。

夫として父親として、二人への想いを一時の欲望で汚してはいけない。

「ううつはあはあ、マヤちゃんいつまでやっても一緒だよ、俺は絶対射精し

尻タブへの心地よい感覚が見なくても無理矢理解させられる。

マヤが金髪をかきあげて、唇を吸い付くように男のだらしない臀部へとキスの嵐を見舞ったのだと。

「は、やめっ、つつああああ」

ちゅうちゅうと湿った音を立ててお尻が一方的に口づけされる。

丁寧に右の尻タブから順に、余すところなく尻全体を唇がはっていった。

「ちゅううううっ♡ちゅぽお♡、あっ、オイシッ♡がんばってるお尻好きになりそう♡あうむちゅううううううううう」

脳がククラクラするほどの尻全体を献身的に愛撫する口づけ

異様な甘い空気におかされて、男のペニスがギンギンに反り返るとパックパックと尿道口が開閉し透明なお汁を垂れ流していった。

「あっあっ、あっ、やめっ、マヤちゃん、それやめてダメえいっちゃう」

これまでに経験したことのないマヤの異質な甘美なキスが脳髓を直撃し射精へのトリガーが引かれそうになる。

お尻へのキスという行為そのものもそうだが、なによりマヤの言葉はこれまでの冷たい響きとまったく違う。

もれだすような甘ったるい雰囲気を見せて、こちらを好いているのではないかと思ってしまうくらい媚びた声に聞こえた。

「なあに？ おじさん、お尻にキスされただけで、イッチャイそうなんだ？♡ヘンタイだなあ♡」

言葉を聞くだけで、ニンマリと口角を持ち上げているマヤの笑みが想像できる。

声も今までの冷たい言葉責めとは打って変わって、やさしさの感じ取れる

甘い響き。

「この内側の谷間とかあ？♡むっちゅうううううう、イイ感じそうだね♡ あうむちゅうううううっちゅぽ♡」

閉じた尻の合間に割って入るように、尻が広げられてその中央近くを唇がはっていく。

「あっ、だっ、だああめ、い、いいい」

唇が尻の中央を責めたてると、真っ赤になった亀頭がぶっくりと大きく膨れ上がった。

「ちゅうううううっ♡イイでしょおじさん、奥さんより娘ちゃんよりこの、ちゅちゅうううう、この尻キスのほうがずっと好きでしょ？」

ちゅっ、ちゅうっと何度も音を立ててお尻が愛撫されるたびに臀部が熱くなっていき、赤く染まっていくのが感じ取れる。

アナルを責められないにもかかわらず強制的に、尻が性感帯にされていく。それもキスだけで――

マヤの甘いアプローチが男の最後の砦を完全に破壊しようとしていた。

「あっ、あっ、あもうだっ、だっああああっ」

なぞるように丁寧に尻にキスを繰り返していたマヤが両手を使って、ゆっくりと男の尻を左右にわり広げていった。

恥ずかしさを自覚させるように指先で尻肉をつかんで奥のすばまりをさらけさせる。

「ちゅううううっ♡ちゅぽおっと、もうデそう？じゃあ最後、この尻の内側皮膚がウスイ所、いっぱいキスしてあげるからあ、もらそっか♡？」

ささやきながら、マヤがひろげた尻タブの内側を指でなでさすった。

「肛門近くのもっとも恥ずかしい場所、その敏感なポイントに唇がつけられる。」

それは、男にとって想像しただけでもイキそうになるくらい、恥ずかしくも甘い言葉だった。

「あ、だっ、もうだめえ、あっああっ」

「じゃあいくよ♡お尻の内側キスされて白い裏切りのおもらし汁、ぶっかけちゃいな？」

——ココにとでも言うように、一度男の臀部から手をはなしたマヤはトンとシートの上にあるスマホの画面「妻と娘の写真」をタップすると、再び尻肉を両手でわり広げた。

「ふうううううっ♡」

興奮を最大限に煽るように尻穴に向かって吐息がふきかけられると、ゆっくりと唇が尻間に近づくのが感じられた。

「あっ、あっ、あ、ああっ」

「じゃあ感じな、ちゅうううっ♡」

来るっと思構えた尻へあたたかい粘膜の感覚がはって、とろけるような熱がそのまま股間へと流れ込んだ

「ちゅぽおっ♡」

心地よさに浸ろうとお尻の力をぬいたが、口愛撫は一瞬で終わり、唇がはなされた。

「——なーんて、キスでイカせるわけねーだろ、…ヘンタイ」

「あっ？」

尻の内側が一瞬だけ唇をはわされたと思いき期待と共に射精への準備がととのっていたが――

「噛まれてイケ、はぐぐうう」

「はぎやああああああああああああっっっっっっっっっっっ」



期待した甘い唇でのキス。
それを受け入れるように弛緩した尻の内側に、マヤの歯が内肉へと沈み込

んだ。

それこそお尻の一番皮膚がうすい弱点に容赦なく少女の歯が食い込む。

「はぐう、ふぐう」

「はひゃああああああああああああっつつつつ」

マヤが尻肉をハグハグと噛み、ねじるように引っ張ると――

勃起したペニスの先からポトポト、ポトトとおもらしをするみたいに白い液体があふれ出してきた。

「はぐううつつ、っとあーあ、ぶっかけたなw？」

真っ白な歯をみせて噛みついた尻肉から口をはなした少女が嗜虐の笑みを浮かべる。

汚れの混じった白濁のおもらし汁がドブドブあふれベッド上のシーツやスマホの画面をけがしていく

マヤはその様子を面白がるように嘲笑の言葉を投げかけると、

「コレ見ろ、目をそらすな」

男の尻の谷間から、マヤがスマホの画像を見せつけるように鋭く言及する。視線の先、液晶の上は白い液体が大切なはずの家族を塗りつぶしていた。

「オマエ何した？」

現実を認識させるようなストレートな言葉が心をグサリと突き刺す。強烈な罪悪感がじわりじわりと男を苛んでいこうとするが――

「娘と奥さん……汚すなよマゾ、ちゅううううっ♡、はぐうううううう」

「ひゃがあああああああっつつつつ」

マヤによる再び尻へのキスから尻肉への噛みつきが、男の臀部を襲撃する。ペニスからはボトトッドプドプと勢いのない漏れだす射精が再開される。

「あっ、あっ、ああ、あうううううううううう」

罪悪感すらも塗りつぶすような強烈な被虐の快楽。

汚してはいけない、我慢しなきゃいけないという強い自制を崩壊させて背徳にまみれた甘く暗い精の放出。

ボトボトと白い精液がスマホをよごし――、
しばらくして射精の勢いが弱まる。

お尻への噛みつきが弱まり口がゆっくりと離れていったからだ。

キスと歯形で真っ赤にそまったお尻をふるわせて四つん這いのまま男は、
かつて無い程の喪失におそれそうになる。

だが――

「**何度でもお漏らしさせてやる、覚悟しろマゾ** はぐうううっ」

獲物を痛めつける執拗なへビのごとく、マヤはお尻の肉に再び歯をつき
てて噛みついた。

「はああああああああああああっんんんんん」

ドブドブドブドブッ

もはや喜色を隠せないほどのあえぎ声をあげて、男は尻をたかだかとベッ
ドの上に跳ね上げさせ精液を撒き散らした。

尻タブにキスをされ、歯形が残るほど噛みつかれるたびに、男の淫棒から
はだらしない白い液体がこぼれだしていく。

しかも勢いは弱まるどころか次第に、お漏らしの量を増やしていつていた。

「はぐうう、あーあ、クセになってきてるなコレ……」
お尻から歯をはなして、マヤがその様子をまるで他人事のように小さくつぶやいた。

「……オマエサイテーだな、女の子にお尻を噛まれてえ、自分の奥さんと娘に汚いセイエキぶっかけて……、オワッテルね」

身体の内側から凍えるほどの冷たい侮蔑の言葉。

それが心をズタズタに切り刻まれるほど、大切なモノが崩れていく。

それでも少女は容赦なく男の臀部へと手をかけてわりひろげた。

「あつ、ダメエ、マヤちゃんっもう勘弁してえええええ」

プライド、家族、愛情、色々なものをグチャグチャに塗りつぶされて男は目尻をうつすらと湿らせて、マヤへ哀願する。

射精するたびに家族から心が離れていき、底なしの背徳の快楽にのみこまれていく。

「おじさん泣いちゃったね♡ でもだめ♡何回でもお尻噛んでおもらしさせてア・ゲ・ル」

ニコリとした天使の笑みで、やさしくささやくような悪魔の言葉。

その言葉から漏れる吐息が、ゆっくりと尻タブに近づいていくのが感じ取れ――

「……だから、救いようのないヘンタイに、はぐうううう♡♡」

男の大きなふるえる尻の内側の肉が、がっぷりと容赦なく噛みつかれた。歯形が完全に残るくらい強く噛まれて、ギリギリとねじるように引っ張られる。

いままでで最も強烈な噛みつきに、歓喜するように淫棒が大きく跳ね上がる。

